

子の発達とメスの妊娠が 飼育アビシニアコロブス集団の社会交渉に及ぼす影響

河野 穂夏

【目的】オナガザル科のアビシニアコロブス(*Colobus guereza*)では、母親以外の集団の他個体が母親から赤ん坊を抱き取り、母親も他個体によるこの行動を許容することが多いということが広く知られている。他方、アビシニアコロブスでは、赤ん坊期以降の子と母や集団の他個体との関わりについてはほとんど研究されてこなかった。神戸市立王子動物園で飼育されているアビシニアコロブス集団では、2011年6月から2013年9月の期間に2頭のメスが計7回の出産を行った。本研究では、誕生時期の異なる7頭の子の社会交渉に関する発達変化を縦断的に示すとともに、それらの組み合わせで子の0カ月齢から28カ月齢までの横断的な発達変化を示すことを第1の目的とした。さらに、妊娠したメスが社会行動を変化させるかどうかを検討することを第2の目的とした。アビシニアコロブスでは発情しても、性器の腫脹のような身体的な変化は見られず、発情時に特有の音声を発することなども観察されていない。さらに、出産直前でも腹部の膨らみが目立たない。したがって、妊娠によって社会行動が変化するのであれば、メスの社会行動を観察することによって、メスの出産がある程度予測できる可能性があった。

【方法】神戸市立王子動物園で飼育されているアビシニアコロブス集団8頭~11頭を対象に個体追跡観察を行い、接触の有無や社会的遊びの生起、親和的行動、攻撃的行動を記録した。観察期間は2012年12月から2013年10月までの46日間、総観察時間は121時間であった。

【結果と考察(1)子の発達】子が母親に抱かれている状態を含め、子と母親との接触率は加齢に伴って減少した。また、子と母親以外の個体との接触率も加齢に伴う減少傾向があった。その一方で、子と他個体が近接している割合には加齢に伴う変化は見られなかった。子が母親等の個体に抱かれている状態の生起率は長期的な視点で見ると加齢に伴う減少傾向が明瞭であったが、どの個体でも一時的に大幅な増加を見せることがあった。この事実は、子が発達のある段階で母親やそれに準ずる個体との接触を求めるようになる比較的短い期間が存在する可能性を示唆した。子が母親に抱かれなくなることは離乳の指標として利用できるが、子が母親に抱かれなくなった後も子と母親が接触・近接していたことから、授乳の必要がなくなっても、子と母の関係は継続すると言える。子の社会的遊びの生起率は、加齢に伴う変化は見られなかった。むしろ、観察月ごとの社会的遊びの増減の傾向はすべての子でほとんど一致していた。つまり、社会的遊びは子の年齢に関係なく行われ、集団内の子同士で同期して生じたために、観察月ごとの遊びの生起率が5頭の子で類似したと考えられた。

【結果と考察(2)メスの妊娠】妊娠後期と出産直前期にメスが誰とも接触・近接せず、単独でいる割合が大幅に増加した。このことから、成体メスの接触・近接関係は妊娠の進行と関連している可能性が考えられた。成体メスによる子への攻撃行動・拒否行動は、出産直前期と産後期には観察されなかった。出産直前期と産後期において、メスが他個体に対して挨拶行動を行ったことは観察されなかったが、同じ時期に他個体からの挨拶行動は受けていたことから、出産の直前・直後には、成体メスが他個体に働きかけるよりも他個体から働きかけを受ける方が多くなると言える。妊娠期間の設定が妥当であったか、観察時間が十分であったかという課題が残った本研究であったが、0カ月齢から28カ月齢までの子の発達変化を示すことができた点や、妊娠の進行によってメスが集団の他個体との社会交渉を変化させることを初めて定量的に示した点において、本研究には意義があったと言える。(比較行動学)